



Holi Knights Saga

筆者:嘉村健

絵師:こきつね

プロローグ ジャンヌ・ダルクのような英雄

私の家系は全て軍人だった。祖母も祖父も父も母も、大きな武勲を立てて、戦争で死ぬ事が当たり前だったのだ。親が死んで悲しいかって？ 私が育ったのは紛争地帯だ。銃声が子守唄で育った私には、そんな事を感じる余裕すらなかったからな。いや、覚えていなかったというのが正しいだろう。私を育ててくれたのは両親の上官、ジーク・フリート少佐だった。不死身のジーク・フリートと呼ばれ、数々の武勲を立てた英雄だ。

育て親のフリート少佐のおかげで、そんな私も物心ついた時に、ベレッタのM92Fを玩具のように扱い、6歳の時には自動小銃のAK47を当たり前のように扱い、戦場を駆け抜けていた。

今、考えれば恐ろしい事なのかもしれない。人を殺す事に何の躊躇いもなかった。数百人の兵士を殺し、英雄と崇められた。

味方では英雄だが、敵国では殺人鬼に過ぎない。しかも、敵国の女王の物を盗んだり、人質にとればどうなるか分かるだろ？ 死刑だよ……敵国の女王の友達にならなければ死なずにすんだかもしれない。私を

殺そうとしているのは、アースガルド帝国総帥兼女王フレイヤ・アースガルド……友人である。

ギロチンの刑だとさ……科学と魔法が存在する世界で、ずいぶんと殺伐で、アナログなやり方だ。何処かの部族のように私の首をネックレスにでもしたいのか？

嫌な事にこうして城内の豪華な一室で軟禁状態、日記を書いていられるのも彼女なりのお節介な親切心らしい。私的には大罪人なのだから、ハエが飛ぶような汚い地下牢にでも入れ、そこで悪人面のマッチョな男どもが私をレイプし、精神を壊してくれるのならば、どんなに幸せだっただろうか。

「いかがいたしましたか？ 顔色が優れないようですが……」

机で日記を書く私に話しかけてきたのは、ケットシー族のメイド女性だった。猫耳と尻尾が特徴の種族だ。名前はニキータ・ヒナギヌ！ 愛想笑いと死刑囚に対して小馬鹿にしているような物言い、私は腹が立った。

飲み干したティーカップを猫耳メイド、ニキータに投げつける。だが、ニキータは、ティーカップを簡単に避け、その場から残像を残して私に迫った。

「いくら贋作でも壊しちゃ駄目ですよ。普通の雑貨品より少し高いのです」

部屋には引き裂いた絵画や、砕け散った壺、銅像が絨毯に転がっている。全て私がやったものだが、ずつと片付けもされていない。

「ふざけるな！ そりゃあ、顔色が悪くなる！ 殺されるんだからな！」

「だからと言って……」

ニキータは笑顔を向けたかと思うと、私の右腕に関節を決めて、あらぬ方向に折り曲げようとする。

「暴れて良い道理はありません」

「がっ!? ふざけんな離せ!」

「やっぱりこーいとお猿さんは挨拶を教え込まないと駄目なんでしょうか?」

ニキータの顔が間近に迫る。

「まさか!? や、やめろ!」

ケットシー族の挨拶の仕方を思い出したが、遅かった。私の口内に猫特有のザラザラとした舌が突き込まれる。甘い唾液が流し込まれ、口内が蹂躪されていく。

「いい感じですよ……このままもつと楽しみませんか?」

唾液の糸を滴らせ、そんな問いをしてくる。獣のライカンスロープ系のケットシーなどの種は狩猟民族で、力こそ正義という思考が強い。部族の長も裁判も嫁選びも、決闘で決められ、力の強い者が優先されるといふ、しきたりを聞いた事がある。我が猿人類であるミッドガルドは力が非力で、圧倒的力を持つ、半獣人であるライカンスロープ系の種族に抵抗できず、強盗や強姦、通り魔の被害者になる事がよくあるのだ。

種族の中で一番凶悪な性格の魔族並に、犯罪率が多いというのは、何となく頷ける。確かにケットシー族の挨拶はキスで、ディーブに近いものがあるが、そのまま行為に走るのとは勘弁していただきたい。

「私は女だぞ!」

「日記に書いていたじゃないですか? レイブされて何かも忘れたら……」

猫耳メイドの手が私の股間に触れ、その感触に身体が跳ねる。

「やめろ! やめてくれ!」

泣きながらの懇願だった。それは私にとっても驚きの行動だった。死の恐怖が、私を弱くしていたかもしれない。それは兵士や英雄ではなく、只の少女の反応になっていた。

「つまらないですね……まるで只の少女のようですね」

そう言ってニキータは、部屋を出ていく。残された私は、情けなく嗚咽を漏らしていた。

私は凄く惨めだ……同性の女に犯されそうになって、泣きながら懇願したのだから。

処刑の日。部屋を出る際に手枷を付けられた。豪華な部屋とも、これで最後らしい。こんな事なら、部屋でゆったりと過ごせば良かっただろうか？ テーブルにあった高級果物や菓子類や豪華なポットのティーには、全く手をつけていなかった。

処刑場に辿り着くと、手枷を付けられたままの私は、羊皮紙を渡された。それはエルフ語で書かれた契約書（？）のようだった。エルフ語で書かれていて、何を書かれているのかさっぱり分からない。

偉そうなダークエルフの士官はペンを持たせ、書くように促す。

かつての大昔の英雄ジャンヌ・ダルクも処刑される前は、こんなやり取りがあったなと思いつつ、私は自分の名前でサインした。16歳で死亡か……短い人生だったよ。

手帳で日記の続きを書き続けていたが、気を紛らわす事はできなかった。私は気づけば、断頭台に立たさ

れていた。様々な種族が私を見る。エルフ、ワーウルフ、ケットシー、しんぞく神族、魔族、アンデッド、ミッドガル。戦争で争っていた種族が、こうして私の処刑を仲良く見れるほど平和になったようだ。

ふふっ……まだ戦争が終わってから数ヶ月しか経っていないのにな……

戦争に参加したのは無駄ではなかったよな。

ニキータが手帳を差し出せと、手を伸ばす。

「待ってくれ」

周囲を見回したが、フレイヤの姿がなかった。かつて一緒に戦った白き魔王は、もはや死刑囚に変わり果てた英雄に、興味を持たなくなつたらしい。親友だと思っていたのにな……最後で裏切られるとはな。

「日記の続きは私が書きましょう。それで良いですね？」

「……ああ」

そう言つて私は嫌そうに返事をし、ニキータに手帳を渡す。

そして……セック・トライアルは処刑されました。2114年8月25日の晴天の暑い夏でした。その首はすぐに晒され、セックの表情はそう……目を閉じ、死の恐怖を感じさせない顔でした……
彼女の処刑の日が嘘のように……何処かで音楽隊が、陽気な女王行進曲を奏でていました。

記録…ニキータ・ヒナギヌ

1章 女王フレイヤの訪問

2113年4月9日の晴天の春。

何処からか陽気な行進曲が聞こえる。曲名は確か女王行進曲だったか？アースガルド帝国の女王、フレイヤ・アースガルドの為だけに作詞された曲らしい。軍歌や行進曲というより、まるで玩具箱をひっくり返した童謡のようだ。戦争を馬鹿にしているような感じがすると……私、セック・トライアルはそう思う。

東の国ジパング、首都キョート。木々や山に囲まれ、ビルと最新鋭のコンクリートの家の合間に、古い木造建築物が見える。自然と歴史建造物、最新鋭の住宅地に囲まれるのがこの国の特徴である。

連合国に統括される前の大昔、ニンジャというアサシンが武勲を上げた国だったという。他にもちよんまげという奇抜なファッションがあったり、ハンカチサイズの紙一枚で工芸品を作ったり、特殊な文化を持つジパング。犯罪率が低く、紛争も起きにくい地域だ。

ジパングではアースガルド帝国の影響が無いとは聞いていたのだが……甘かった。電子機器の類は無く、駅の自動改札機、自動販売機、売店の商品のディスプレイタッチパネルまで魔導機器に変えられ、主流だった電気自動車は魔導自動車に変わっていた。

異世界人のユグドラとの戦争、ラグナロク戦争は私達、ホモサピエンス、つまりはミッドガルド人は、魔法に依存していなかったし、科学だけで充分だと思っていた。ミッドガルドは戦争に負けてからは、電気エネルギーから魔法に完全にシフトしていた。いや、魔法に無理矢理に、シフトされたと言っている。

私は魔法に対して良いイメージを持たない。デメリットがあるから？ いや、違う。魔法はもちろん、燃料などは使わないし、空気も汚さない。自然物（植物や水、石、土、風、光）に体内に埋め込んだ魔力回路をリンクさせ、内在するマナ（MPとか気とかいった方が分かりやすいか）を使う。個人差はあるが、魔力自動車なら2〜3時間は稼働できるだろう。マナを使用する事での疲労はゆるやかなもので、マラソンというよりも、自転車に乗っているような感覚だろうか。実際に30分〜1時間の休息があれば、マナは完全回復するのだ。

私が魔法に対して否定的なのは、この人物がいるからだろう。ユグドラのアースガルド帝国の女王、フレイヤ・アースガルドは魔法を使う事を義務とした。そして魔法を使えない者を排斥し、1000万人以上の罪の無い、ミッドガルドの市民が処刑された。魔法はクリーンで、ガスや電気などと違って地球を汚さないからだというエルフっぽい理屈だが、そこまでやる必要はあるのか？ これでは魔法の使えない者は死ぬしかない。魔法が使えない者は、ロストと呼ばれ、身を潜めているが、ユグドラだけでなく、ミッドガルドの

人間にまで、迫害されるようになっていた。今の世界はロストにとって、地獄でしかない。電子機器は排除され、交通機関やライフライン皆無。主流になっていたID電子マネーも魔法式にされ、買物すらできないのだ。ロストは魔法を使える者に、かくまって貰うしか生きる術がないのだ。

異世界人が来る前の当時は、ミッドガルドは世界統一され、連合国家となっていた。アメリカ、ヨーロッパ、アジア、オセアニア、アフリカ、全ての大陸の国々が集まって、ミッドガルドという1つの国となった。連合国家になる前は、独裁国家が同盟を結んでいた時代。国々が侵略され、独裁国家の同盟と戦う際に、知らない間に、世界統一国家になっていたという次第だ。当時は内乱が多少は起きていたものの、平和な世界だったように思える。それが……異世界のアースガルド帝国が来てからは、大きく変わった。

いつからこうなったのか？ 50年前に、異世界人ユグドラが来なければ、こんな事には、ならなかったのかもしれない。異世界人のユグドラは、望んでこの世界に来たのではないらしいが、太平洋の真ん中に、ユグドラ大陸が突然に現れた。

そして私達、ミッドガルドはユグドラ大陸に上陸し、様々な種族と出会った。神族、魔族、エルフ、妖精、ワーウルフ、ケットシー、ハーピー、アルミラージ、人魚……その大陸にある文化、言語、生物、技術、魔法は私達にとって未知な存在だった。

ミッドガルドは、その魔法という未知な力に興味を持ち、そのユグドラと同盟を結び、貿易をするようになった。ミッドガルドは科学力を提供し、ユグドラは魔法を伝えた。ミッドガルドと、ユグドラはその技術に歓喜し、互いに発展させていった。だが、馴れ合いは長くは続かなかった。

領土争いが戦争を引き起こした……

独裁国家との戦争が終わって間もなく、まだ独自の思惑があったのかもしれないし、戦争によって資源を使い果たし、欲が出たのかもしれない。ミッドガルドの人間は、ユグドラ大陸の領地から、無断で資源を貪るようになった。材木、鉄、金、宝石、石油、レアアース、資源は豊富にあった。

それに腹を立てたユグドラ大陸の、アースガルド帝国は、ミッドガルド連合国に、宣戦布告した。自然博愛主義者のエルフの女王である、フレイヤ・アースガルドは、自然を壊す事を特に嫌っていた。話し合いすら、持ちかけてくれなかったという。

私達、ミッドガルドは巨大人型兵器、ドールに乗り込んで戦ったが……魔力で動く巨大人型兵器の魔導機には、敵わなかった。科学より魔法の方が優れていたという事なのだろう。わずか8年の歳月で、ミッドガルド連合国は、敗戦した。

しかし、戦争が終わってからの女王は、寛大のように思えた。ミッドガルドは、制裁を加えなかった。それどころか、敗戦国の傷ついた兵士や民間人を労い、多くの寄付を与えた。

その女王が、今度は、魔力が使えない者を排斥する……どうやら女王は、善と悪を超越するものらしい。さすが白き魔王というべきか。それとただ単に、狂っているだけなのだろうか？

そう考えながら、女王行進曲が聞こえる広場の方へと、足を運んでいた。

広場の床はこの街に珍しいレンガ造り、西洋風な噴水と小さな時計塔と、点々とベンチが置かれている。

行ってみると、広場には、人だかりができていた。人々が見ているのは、一座で使うような、簡易の馬車小屋のステージであった。そこで可愛いエルフ少女の子役が笑顔で行進曲に合わせて歩き、風景が変わる度に踊りをし、ワーウルフ、ケットシー、人魚、ハービー族の役者が増えていく。

そして女王行進曲が止まると、役者達が一斉に足を止めた。

【私達は話し合いに来ました！　ですが、それができないなら……さあ！　撃てるものなら撃ちなさい！　ここにいるのは私、女王フレイヤと各国の王達です！】

エルフの子役、幼き女王フレイヤの台詞と共に、黒い垂れ幕が下ろされ、大きな木偶人形が現れる。どうやらミッドガルドのドールらしかった。

木偶人形が、役者に銃を向けた刹那、パン！　パン！　パン！　という大きな音と共に硝煙が上り、役者の数人から赤い花が散る。

「嘘だろ……」

有り得ない展開を見たせいも、私の何かを刺激したのか、脳裏に何かのビジョンが浮かぶ。鮮明ではないテレビの砂嵐のように、それが何なのか、全く思い出せない。いや、思い出したらまずいのだ……それは……

パチパチパチという観客の拍手と共に、いつの間にか、私は正気に戻っていた。劇は終わったらしく、役者達が会釈する。

すると、役者達が舞台から降り、かごの中に入った一輪の花を配り始める。どういった基準で選ばれているのか分からないが、子供から大人、年寄りまで限りある一輪の花を配っていく。

「貴方と世界に平和を！」

フレイヤ役のエルフの子が私に笑顔を向け、一輪の花を差し出す。

その幼き少女の笑顔が、どことなくあいつに似ていた。脳裏に浮かんだ、砂嵐の映像に、エルフの子役が一致する。これはいつたい……？

「お前……何処かで会った事あるか？」

「はい？」

私のその変な質問に対し、エルフの子役の少女は、不思議そうに首をかしげる。

「すまない……忘れてくれ」

エルフの子役の少女は会釈すると、舞台に走って戻っていく。揺れる長い金髪、それは確かに誰かに似ていた。

私にあんな可愛い知り合いがいる訳ないか……

イズモ……キョートと並び、規模が大きい街のように思えた。しかし、首都に近い割には、畑や田んぼが多く、森林地帯が多い。それでもコンビニ、ファーストフード店、ショッピングモール、銀行、病院などの施設はしっかりしている。電車もバスも10分おきに来る。

私はイズモ駅から、徒歩20分のアパートに住んでいる。広さは8畳の1R、風呂、トイレ、キッチン付

き、家賃3万クレジット、コンビニから徒歩5分の良物件だ。

駅から少し遠いのは難だが、設備とコンビニから近い事から気に入っている。これで、高校生活も、エンジョイできるといふものだ。

私は自動改札機に、マジックIDパス（私の魔力じゃないと動かないIDカード、身分証やら犯罪経歴までも分かる。クレジット機能付きで、電車やバスにも乗れて便利。最近はこちらが主流）をかざす。当然ながら、ゲートは開いた。

ほっとため息をつく。連合国所属の元傭兵である私は、罪人のようなものだ。ブラックリストに載っているようなのだが、バレていないようだ。恐らくは幼少期しか傭兵をやっていない事が、幸いしている。

ホームに向かうと、同じアルスター学園の制服が多かった。イズモの市立では、設立されて数年ばかりだが、ユグドラ大陸には2校あり、50年以上の歴史がある。就職率は90%と高く、人気は高い。低い偏差値で入る事が可能だが、高い学費がネックとなっている。だが、私の場合は何者かが奨学金を支払い、入学の手続きをしてくれたのだが……まあ、要するにあしながおじさんという奴だ。私の知らない人間、名乗らない誰かが、私の為に学費を寄付してくれているのだ。

列車内はサラリーマンと、アルスター学園の生徒で、埋め尽くされていた。イズモ駅とアルスター学園、都心との距離は、魔導列車で30分の距離である為、常に満員であった。満員電車で慣れない私は、多少は隙間がある空間を求めて、後ろの車両へと向かう。

運が良い事に1車両が連結中であった。私は迷わずに扉が空いた瞬間に飛び込み、瞬時に席に座る。どっ

と人が流れ込むと思ったのだが、誰も人は入って来なかった。それが不気味に思えて、窓から外を見回す。連結された車両の周りでは、なぜか工事が始まっていた。何かのオブジェを置く為の工事のようだが、なぜこのタイミングで……？

私はふと、ある事に気付く。車両の装いがまるで違うのだ。一般車両と同じ横並びの席があるものの、対面する座席は特急列車か新幹線の造りなのだ。私はグリーン車だと思い、すぐに出ようとしたのだが、アルスター学園の制服を着たワーウルフの少年が堂々と入って来た。

そして後から、アルスター学園の制服を着た、エルフの少女までもが入って来る。

戸惑う私をよそに扉は閉まり、魔導列車はゆっくりと走り始めた。

元の席に座ろうとすると、さっき入って来たエルフ少女が手招きする。

エルフ少女が座っているのは、対面座席だった。人見知りな私であったが、同じ学校の生徒として、話しておきたかったというのもあった。私は対面する席に座る。

「あんた……同じアルスター学園の生徒なのか？」

「そうですよセック・トライアル……お久しぶりですね。あれから何年経ちますか？」

笑顔で答えるエルフの少女、私の名前を知っている？ 私は思わず周囲を見回す。私を知っている人物の知人が、差し向けたのかと思ったのだが、いるのは、さっき入って来た、ワーウルフの少年がいるだけだ。携帯魔法石版（要するに携帯電話だ。私も持っている）をいじっている。

「……すまない……何処かで会ったか？ エルフ族の知り合いは、私にはいないんだがな」

エルフの少女をもう一度、見る。長い金髪、エルフである特徴の長く尖った耳、瞳は澄んだ青。雪のよう

に白い肌……顔は整った顔立ちで、誰が見ても美人といえる部類だ……まるでお姫様のように……

お姫様？　そういえばこいつ何処かで……

「それでは、こういえば分かりますか？　アースガルド帝国女王、フレイヤ・アースガルドといえは」「あんだ！」

思わず立ち上がり、身構える。やはりそうか……テレビで散々見る顔だ。どうりで見知った顔だと思った。それよりもどういう事だ？　女王自らが、只の傭兵である私を捕まえに来たとも言うのか？

護身のプラスチックガンを、制服の裏ポケットから探る。マナで撃ち出す電気銃で、気絶させる事しかできないが、私のは改造したものだ。電圧を上げれば、即死させる事も可能だ。

「どうしましたか？　それではまるで、私を忘れてしまったような振る舞いですね」

本当に首を傾げて言う、女王アースガルド。

「私も知らなかったよ……私が女王と知り合いだなんてな」

隣の座席のワーウルフ少年は、この状況にも気づかず、未だに携帯魔法石版をいじっている。

「私が本物の女王ではないと、思っていますか？」

列車のテレビからは女王の影武者が本物を名乗り、反帝国軍を指揮していると、報道していた。

「偽物じゃなかったら何なんだあなたは？」

「本物です。今、女王の座についてるのが影武者です。暗殺されそうになり、こうして逃げ延びているという訳です」

「なるほどな……だが、私の記憶では女王と知り合った事はない」

「本当に覚えていないのですね」

悲しそうな表情をする女王アースガルドと名乗る少女、まるで大切な友達をなくしてしまったかのように

……

「……お前と私は何処で知り合ったというんだ？ それに私は子供の時から、女王は嫌いだし、大切な友人、バルドルを奪った！」

その友人バルドルは実際に死んだ訳ではないが、全く別の人間に変えてしまったのだ。バルドルは勇敢な少年で、戦友であった。私と同じ子供なのにも関わらず、指揮し、多くの敵兵を倒した。そのバルドルは不覚にも仲間を助ける為に戦地に飛び込み、捕虜となった。

それからバルドルの無事を知ったのは戦争が終わってからだ。久しぶりに会いたいという簡単な文章の手紙であったが、戦争が終わってからも、反帝国軍のレジスタンスをやるうとしていた私にとっては心強い味方であった。

手紙の住所を頼りにマンションに行ってみると、そこで出迎えたのはバルドルではなく、エルフ族の女性だった。そのエルフ族の少女はバルドルの母親だと言った。戦争で早く両親を失ったバルドルには、両親すらいなかった。

バルドルの部屋に通されると、我が目を疑った。そこに居たバルドルはまるで別人であった。エルフの息子、娘らと、笑いながらテレビゲームをしていた。異種族を嫌っていたバルドルが……まるで子供のようであった。

そのエルフの女性から話を聞くと、バルドルを養子に迎えたというのだ。私は信じられなかった。

呆然と立ち尽くす私に血の繋がっていないバルドルの兄妹達が、テレビゲームをしようと、私を誘う。そしてバルドルさえもが……

私はいても立ってもいられなくなり、その手を弾き、その場から逃げ出していた。それ以降、私は完全に牙を抜かれ、私は傭兵を辞めた。

そうだ……女王だ。女王が全てを変えたのだ。優しい言葉で全てを包み込み、麻薬のような食事を与え、家族という檻で囲み、愛という毒でバルドルを殺したのだ。

「人はどうしたらあそこまで変われる……アースガルド！」

逆恨みに近い叫びだった。その叫びにフレイヤが口を開く。

「貴方は……私と熱く語り合ったマジンゴーやザンダム談義の事すら、忘れてしまったのですか！」

「はっ？」

聞き違いではなかっただろうか？ マジンゴーやら、ザンダムの単語が出てきたような……ちなみにザンダムとは騎動勇者ザンダムの事である。元はユグドラ製の小説作品で、魔導機を題材にし、アニメ化されている。デザインと似たタイトルからあれのパクリではないかと、物議を醸しだしていた。しかし、話の内容が全く違う事からその疑いは晴れた。マジンゴーZも同じく、ユグドラ製の小説作品であったが、アニメ化されると、ロボットのデザインやそのネーミング、歌までもが似ており、またもやあれのパクリではないかと、物議を醸しだしていた。しかし、この作品も話の内容が違う事から、その疑いはすぐに晴れた。

「私とお前は友人だったっていうのか？」

「はい、親友でした」

表情を変えないフレイヤに、私は溜息をつく。どうやら女王は、猛獣の牙を抜くのが得意のようだ。

「それじゃあ、その親友のフレイヤ・アースガルドさんは、私に何の御用だ？　まさか帝国を取り戻して欲しいなんて、言うんじゃないだろうな」

「そのまさかです。力を貸して欲しいのです」

「確かに私は元傭兵だが、女王様に気に入るような力は持っていません」

「私は今、多くの友人の力を必要としています。私を助けて欲しいのです……セック・トライアル」

そう言って彼女が真剣な眼差しで見る。だが、私にとって今の女王が本物だろうが、偽物だろうと関係ない。

「断る……今の状況でどのくらいの戦力があるか分からないが、帝国が相手なら私1人の戦力で、どうにかできる相手じゃない」

「ザンダムの勇者理論を覚えていますか？」

「あっ？」

まだアニメネタを持ち出してくるのか？　姫様は見た目とは裏腹にオタクなのか？

「ザンダムの憑依精霊、ララはニムロ・レイに勇者理論を提示しました」

「あれだろ……多くの仲間を引き入り、戦う意思の強い者が勇者になれる」

子供の時に何処かで見たと記憶はあるので、だいたい答えられる。

「はい、私は勇者になりたいのです。その為には1人でも多くの仲間が必要なのです」

つまりは今の女王には、多くの後ろ盾がいるという事か？ この場合は、貴方しかできないのですとか、貴方には特別なマナを纏っているのですとか、言った方が勧誘できたんじゃないか？ まあ、何を言っても私は女王モドキと組む気はないが……

「でもな、ザンダムの最後はな……二ムロは結局、1人で戦っただろ？ シア・アズナに裏切られて……魔王に仕立て上げられて、かつての仲間信じて貰えず、孤立しながらも戦った」

「二ムロは1人で戦ってませんし、孤立もしていません」

「なっ……？ 孤立してただろ？ 味方してくれる奴は誰もいなかったんだ！」

私の記憶が確かならそんな内容だ。

「確かに二ムロを信じない者もいました。カミュ、ジャド、ブライは二ムロを密かに支援しました。それが1人で戦った事になりますか？」

「補給物資を与えたり、新武器の開発とか、航路の道筋を教えたりするのは確かに支援かもしれないが……」

「そしてシアも、二ムロを慕っていました。二ムロの必死の訴えに、シアも仲間と共にメテオを止めました。テラ地味の暗黒瘴気は二ムロの呼びかけで答えた皆の願いのホーリーによって、浄化された……仲間の力が無ければ暗黒瘴気と共にメテオで、テラはおしまいでしたよ」

「確かにそう言われてみればそうだが……」

「ね、1人の力は馬鹿にならないんですよ」

その後も女王モドキはいろいろと言っていたが、私は全て無言で通した。列車から出た時には、私は全力で逃げていた。

同じ学年でも、クラスもという事は無いとは思いますが……

アルスター学園の校門をくぐる。

西洋の神殿を思わせるような造りと、城のような庭園が普通の学校ではない雰囲気がある。ジパングの歴史建造物の前にあつたら、訴えられそうなレベルだが、ビルに囲まれている為にそういった事はないようだが。

「よう」

男子の声が聞こえて振り向く。

そこには、同じアルスター学園の制服を着た、ワーウルフの少年がいた。

私は何度か思考をめぐらし、ワーウルフの少年をじっと見つめる。ワーウルフに知り合いにいた記憶はない。黒く長く尖った狼耳に、狼だけにウルフカット、赤い瞳、ふさふさの尻尾。私は、女王もどきと同じ列車に、乗り合わせた事を思い出す。

「あー……同じ列車に乗ってたよな」

「おいおい！ 本当に忘れてんのかよ！ オレだよ、フィン・マックール」

苛々した口調で言う、ワーウルフの少年。どうやら本当に、私の知り合いだった人物らしい。

「すまない……何処かで会ったか？ 本当に覚えてないんだが」

私の知り合いに、他種族はいない。そもそも、戦争で敵対していた種族と、仲良くしていたとは、思えない。子供からこの学校に入る前は、傭兵だったのだ。

「オレの首にナイフを突きつけといて、その台詞はないだろ？」

いや……敵兵なら有り得るのか？ そんな奴ならいくらでもいたぞ。首筋にナイフを突きつけた後は、だいたい殺していたような気がするが……

「帝軍……敵兵だったのか？ ここではそういう話は……」

「重症だなこりゃあ……全く覚えてないのか？」

思わず肩を落とすフィン。

「名前誰だっけ？」

「フィン！」

「ライカンスロープAで良いな？ 次からはそう呼ぶ」

ちなみにライカンスロープとは、獣族の総称である。

「おい！」

思わず肩を掴むライカンスロープA。その力は、ライカンスロープだけあって、強い。私は簡単に、振り向かされてしまう。

「何だ強姦魔」

その言葉に周囲が振り向く。ライカンスロープ系、特にワーウルフは特にその手の犯罪は多い。

「お前な……」

拳を震わせるライカンスロープA。

「何だよ？」

「本当にフレイヤと話して、何も思い出せないのか！」

「フレイヤとは……会ったことがない。いや、本当に思い出せないんだ」

「なに言ってるんだよお前！ あんなに親しくしてたのにか！ お前はフレイヤに対して怨嗟しか、なかったのかよ！」

肩を揺らすフインに、私は何も答えられなかった。

「……フレイヤ」

そう口に出した刹那、幼いエルフの少女が思い浮かぶ。だが、私の中の何かがそれを思い出しては、駄目だと全てをかき消す。

「どうしたのですかフイン」

ゆっくりと歩み寄ってくる、フレイヤが声をかける。

「やっぱりフレイヤの事は、さっぱり覚えてないんだとさ」

「それは仕方ないですね。人には忘れたい過去も、あるのでしょうかから」

「私とは、もう関わらない方が良い」

下を向く私に、フレイヤが笑いかける。

「では、教室で」

手を振って、フレイヤとフインがその場を去る。

時間経過後に、フレイヤの言葉に疑問を抱く。

「教室で……だと」

その疑問は、すぐに解消される事となる。

そこは、普通の教室だった。黒板の代わりに大型魔法石版が使われ、机にも魔法石版が埋め込まれている。一昔の携帯電話のスマートフォンのようにタッチパネルで押し、教師が出す出題に答えれば良いだけ。要点やまとめ、出された課題、前回の授業の内容から全て保存ができる。今では当たり前のシステムだが、この状況は当たり前ではない！

机の右横にはフレイヤ、左にはフィンがいる。同じクラスだけならまだしも、隣の席だという、信じられない事が起きている。

「これはどういうことだ！」

私はできる限りの小声で、怒りを露わにする。

「声が大きいですよセック」

「声も大きくなるわ……」

「マナクラッキングって奴だよ。今じゃマナリンクで、席順とかも決められているからな。知ってたか？ ト
ラブルが起きないように性格が合わない奴は離され、合う奴は席が隣になる。入学時に心理テストをやるのはその為だ」

そう言って、パックのコーヒー牛乳を飲みながら自分の携帯魔法石版をいじるフィン。

マナリンクというのは科学で言えば、ネットの事だ。自然物のマナを通じて莫大な情報を引き出し、保存を行っている。

「フレイヤはともかく……お前、何者だよ」

フレイヤが女王なのに対し、タメロで話しているという事は、それだけ信頼が厚いということか？ それとも王族なのか？

「親衛隊というよりも……スパイの方が近いかな」

「なるほどな。列車で人払いしてフレイヤと話させたのも、お前の差金か？」

「あー、上手いもんだろ」

「じゃあ、奨学金の話もか……そんな上手い話はないもんな」

「あ、それは私の自腹ですよ。セックが入りたという事だったので、奮発しましたよ」

自腹って……お前は数百万クレジットもする大金を払えるのか？ 税金ではないことを願いたいのだが。

「とかお前ら……こんな学校に通って、大丈夫なのか？ 確かこの学校は帝国が運営しているんだろ
う？」

変装も無しで、女王の顔で歩けるもんだ。まあ、かつては平和な国だった、ジパングだからこそなのかもしれない。こここの地域の者は政治に無関心で、特に他所の犯罪に対しては、敏感ではない。

「大丈夫です。私を信用している人間は多くいます。学園の理事長も、私が入学してる事を承知しています」
「今の女王が偽物って、今の政治によっぽど不満なんだろうな」

「不満でしょうね。魔法を使えない者を排除するなど、あつてはならない事です」

「あなた、帝国の女王様に似てるって言われない？」

後ろの席のミッドガルドの女子生徒が、フレイヤに話しかけてくる。
やっぱりすぐにバレてるじゃないか……

「よく言われます」

フレイヤは笑顔で誤魔化す。

「影武者が女王と名乗ってクーデターを起こそうとしてるんですって？　女王と似てると、大変ですよね。帝国軍に間違われたりして」

その話を聞いていたのか教師が歩み寄り、咳払いする。

ミッドガルドの女子生徒は教師から目を逸らし、誤魔化すように、机の埋め込み式魔法石版のタッチパネルの操作を始める。どうやら理事長と通じてるといふのは、確かなようだ。

「セック、帰りに話をしましょう」

と、フレイヤは私にウインクをしてみせる。その言葉に私は、わざとらしく溜息をついた。

「私はバイトがあるからな。いつになるか分からんぞ」

「いつ終わりますか？　できれば携帯魔法石版のIDを教えていただけると、助かるのですが……」

携帯魔法石版は相手のIDを打ち込めば、思念通信テレパスでこちらの意思を伝える事ができる。普通の思念通信テレパスは、伝えたい相手の見える範囲、いると思われる場所に思念を送る事で、会話ができるのだが、1キロ以上離れた場所では使えない。だが、この携帯魔法石版は遠い島国だろうが、山奥だろうが、地下奥深くでもマナリンクによって、探し当ててる事ができる。考えてみれば、圏外の無い電話というのは、厄介なものだな。

「私にもプライベートっていうもんがあるんだ」

「今日は入学式と簡単なHRだけで、午前中に終わりますね……17時で大丈夫ですね？」
やべえ……ちようどにバイトが終わる時間じゃねえか。

「とにかく！今日は駄目だ！」

「イズモ公園で17時に待っています。それでは……」

そういつて笑顔で手を振り、教室を出て行くフレイヤ。

「全く強引なお姫様だな……っていうか……」

イズモ公園って、私のアパートの近くじゃなかったか？ 偶然か……

私のバイトというのは、コンビニのバイトではなく……連合国初の量産魔導機のテストパイロット、いわゆる闇バイトだ。敗戦後は、連合国は鳴りを潜めていたが、バルムンクという組織となって、レジスタンス活動をしていたようだ。給与は月に50万クレジット。サラリーマンの年収が40万クレジットなのだから、それは破格の月収だった。普通の新兵、傭兵がだいたい20万くらいの給与なのだ。平和に暮らしたいという私の欲望と、帝国に復讐したいという気持ちもあった。テストパイロットなら、戦地に赴く事もなく、一泡吹かせてやる事が可能ということだ。まあ、面接に受かるかどうかは別だ。

一応はフォーマルなスーツで、身を固め、くせ毛っぽい髪を何とか整えた。私は緊張な面持ちで、ドアを

ノックした。

「遅いぞ！ 早く入らぬか！」

生意気な子供っぽい声が出て、ドアを開ける。そこには白衣姿のワーウルフの子供がいた。赤髪に狼耳をピンと立て、尻尾を揺らし、腕を組み、偉そうに立っている。

「おい、子供がこんな所にいたら駄目だろ」

私はその子供の衿を掴む。

白衣から想像すると、恐らくは軍施設の研究所か何かの職員が連れてきた子供なのだろう。まさか試験会場に入ってくるとは、セキュリティがなってないな。

「何をするのじゃ!?!」

「お母さんの所へ帰るんだ」

私は子供を部屋の外へと連れ出すと、ドアを閉める。

「貴様！ 博士に何をしている！」

教壇周囲の少尉達（肩の星から察する）が、戸惑いを見せる。

「あつ……あれ、博士の子供だったのか!?!」

いや、あれが博士の子供だったら、その本人は何処にいるのだろうか？ そのような人物は見当たらない。

「馬鹿者！ わしが博士本人じゃ！」

さっきの子供が勢いよく入ってくる。

「あんたが博士？ どう見ても子供だろ!?!」

「見た目は子供じゃが、魔族のわしはお前の十倍近くは生きておるぞ」

魔族は戦争の為に自分の遺伝子すら改造し、神族と戦ってきた種族だ。ほとんどの目に見える姿は、ほとんどまやかしだと言っているだろう。

「貴様！ 博士に無礼な態度を……！」

困む兵士に子供博士は、下がらせる。

「魔族の博士って……あんた何者なんだ!？」

「ふふふ……ドクター・ヘルとはわしの事じゃ」

「ヘル博士って、あのパイオメタルを開発した天才科学者か!? いや、でもヘルは女じゃなかったか？」

「何を言っておるわしは女じゃぞ」

「えっ？」

なんてこった……魔族は性別すら超越しているのか？ 確かに女にも見えなくはないが……妙にボーイシユだ。

「試験を始める……席につけ」

こうして私は無事にテストパイロットの試験を受ける事になったのだが……

筆記試験は私の傭兵時代に学んだ事は、一つも出てこなかった。それもそのはず、私は訓練というよりも、実戦で学べという教育方針で育てられた。ドールの操縦技術はあるものの、ほとんど経験の勘にすぎない。用語やら、マニュアルなどは皆無なのだ。

私のマークシートの解答は、自信が持てるものではなかった。

それから筆記試験が終わると、試験会場はホールが並ぶガレージへと移動した。筆記試験の後は確か……「これから実技試験を始める。説明した通りじゃが、使用魔導機はKOB・27ALTコボルト、連合軍初の魔導機じゃ。試験機にはそれぞれ、整備兵が付いておる。装備はお前達の好きにするが良い。整備は整備兵に任せても良いが、整備も試験評価にされるつもりなので、そのつもりで挑め。ルールは簡単じゃ、選んだ武装で戦い、破壊された者は脱落、残った者を合格者とする」

コボルト……頭部は犬のようで、身体は毛皮のような物に覆われている。まるで獣そのものような……これにドクター・ヘルのパイオメタルが使われているといことか。

整備を始める。試験者に戸惑いが見える。一般的に使われている、コマンドに似た武装兵器が多く、マニュアルも配られている。整備は、ほとんどの者ができるようだが、問題は用意された武装だ。全てが実弾魔力兵器で、ペイント弾のようなものがなかった。

「し、しかし、これは……ほとんどが実弾の魔力兵器ではないでしょうか!？」

「試験番号37……確か義勇軍出身のマイケルと言ったか？ 貴様は実戦に玩具の銃弾でも使うのか？ コボルトの脱出装置は、折紙つきじゃ。それでも不安なら帰るが良い！」

そのヘルの言葉に「やってられるか！」とか、「試験に命をかけられるか！」とか、言いながら愚痴をこぼしながら帰っていくのが、数名。それでも40名は残った。

この魔導機コボルトで、バトルロワイヤル形式で、戦えというのだから、正気の沙汰ではない。だが、私にとっては好都合だ。こういった実戦形式の方が、私にむいている。

私はタラップを使い、胸のコックピットに乗り込む。

「何だよこれ？ コントローラが無い……？」

コックピット内は無駄に広く感じられ、レバー、モニター、コンソールなどの機械機器類が、全くないのだ。あるのは小さな椅子と水晶玉、床に敷かれた魔法陣……これでどうやって操縦しろというのだろうか？ 椅子に座った刹那、私の脳裏にフレイヤに似た子供と、緑髪の少女の顔が浮かぶ。そして私は、これと似たような物を動かした事がある……というのか？

水晶玉に手をかざせば、手の甲に埋め込んだ魔力回路から内なるマナを吸い上げ、動力とする。魔力回路？ そういえばなぜそんな物が私にある？ 確かに帝国によって、魔力回路を体内に埋め込む事が義務付けられているが、それを何処で手に入れた？ 魔力回路の義務化は戦争が終わってからだ。私は戦時中、子供の傭兵時代からこれを持っていた。いったい私は……

水晶玉に手を触れると、手の甲の魔力回路が赤い光を放ち、開いていたハッチが閉まる。気づけば、私の意識がコボルトに憑依したかのように、景色が周囲に広がる。しかも、これは……コボルトのアームとレッグ部分が、まるで自分の手足のように動くのだ。アームの指先から何まで……

これは凄い……どうりでドールが魔導機に負けた訳だ。

(試験番号40、セック・トライアル。その武装で良いのか？)

ヘル思念通信のテレビバスの声が聞こえる。この魔法が、無線の代わりということか。

(大丈夫だ、問題ない)

(その軽微な武装で良いのか？ 追加装甲やシールド、ロッドキャノン、魔導ミサイルもあるのじゃがな。

タスラムRU30と、ヒートクローのみか)

(私はスピード&攻撃重視なんでね)

私はコボルトの手を動かし、タスラムRU30を構える。見た目は拳銃のようだが、弾丸の代わりに、小型グレードを高速で発射する。ロングマガジン採用で、弾倉は30発。マニュアルによれば、魔導化した小型グレードではなく、魔法のバースト[※]フレア[※]を発動するようだ。

(分かっていてと思うが、タスラムRU30は、威力は高いが、自動ロックオン機能は無いし、誘導弾ではない。多分、至近距離ではないと当たらんぞ)

(良いのか？ あんたは一応は試験管なんだろう？ 私の肩を持ったら、少尉達や試験者に睨まれるぞ)

(どうせ聞こえぬじやろう。それに私はお前に賭けておるのじや…：1万クレジットという大金をな。それにお前の遺伝子は面白い)

(賭け事をやってるのかよ…：ん？ 最後の遺伝子っていうのは何だ？)

(試験が終わったら、教えてやろう。この実技試験に合格できたらな)

こいつまさか私の事を知っているのか!?

(ヘル！ お前、何を知っている!？ 私の魔力回路の事もまさか…：)

(何を熱くなっておるのじや。そんな事では勝てぬぞ)

『試験を開始します…：試験者は魔導機に乗り込み…：戦闘準備を開始してください』

試験場のアナウンスを聞き、稼働するコボルト。

どうやら…：負ける訳にはいかなかった。

だが、試験は私の予測に反して、呆気なく終わってしまった。

金属の床と壁が広がるドーム場の施設、役目を終えた私は、この実技試験の会場で、休憩するしかない。金属は燃えにくい素材で、ある程度の攻撃は耐えられる構造になっているようだが、衝撃に耐えられないのか、穴だらけになっていた。

煙を吐いているコボルトを見上げるヘルに、私は何も言うことはなく、棒キャンデーのスツパチャップスのレモン味を、タバコのように啜える。

「しかし……もう少し何とかならんかったのか？」

確かにこの有様はヤバイな……ブランクがあったせいかな、感覚がどうも掴めないようだ。

「食うか？」

「……貰おう」

ヘルにスツパチャップスの梅味をやると、包み紙を破き、同じように啜える。

「感覚が戻らないせいかな……手加減できなかった」

周囲には煙を吐いたコボルトしか、存在しなかった。私の1機を除いては……試験に参加したのは40機……そのうち試験機39機を駄目にしてしまったのだ。

「至近距離でタスラムを撃てば……一撃で葬れるということか」

「いや、正確には二撃だな。タスラムを撃ち込み、ヒートクローの一撃を加えている。爆発の中を通り過ぎているように見えるかもしれないが……みんなやたらと、追加装甲で固めてきてたからな……これぐらい

しないと、駄目かと思った」

「なるほどな」

ヘルは何やら携帯魔法石版で、私が操縦するコボルトの映像をスローと巻き戻しをかけて、じっくり見ている。

「私なんかより、試験番号7番と1番は良かったんじゃないか？ 操縦技術の筋は良い」

「7番と1番？ ふふふ…なるほどな。その目も確かなようだ」

何か嫌な笑みを浮かべるヘル。

「正直、すまんかった。試験機を壊すつもりはなかったんだ」

「そんなことより…あのブーストで、飛び上がったコボルトをどうやってタスラムで撃ち落とすか!? 距離

離はかなりあったぞ。それにタスラムにロックオン機能は、無いはずじゃ」

試験場に使われた場所、天井の高さと、その周囲の広さはプロ野球場のドームくらいあるだろうか？

「距離？ ああ…勘だよ。適当だよ…私は基本的に機械に頼らないからな」

「馬鹿な…魔法、科学の力無しで…ふふふ…さすがわしの血を引いているだけあるな」

「そういえば…遺伝子的にどうたらって…おい、血を引いている!!」

聞き違いだったのだろうか？ いや、私は聞き違いであって欲しいと願う。

「血液検査をしたところ…わしとお前のDNAマップが似ておつてな。恐らくは…」

ん？ こんな所に私の血族が…そういえば私に似てるような…つて、ねえよ!

「ちよっと待て!! お前と私は姉妹とも言えるのか!? いや、年齢が上なら…いや、いや、有り得ないだ

ろ!! 私の両親は人間だったぞ。早くに亡くなったが……」

「それでは……祖父や祖母はどうじゃ？」

「確か……祖父も祖母も軍人で早くに戦死したとは聞いていたが、人間だ……多分」

「可能性としては祖父や祖母じゃな……そのどちらかが、けちゅぞくじゃな」
「けちゅぞく？ 血族か……嘔むなよ。」

ヘルは舌を噛んだのか、痛そうに目を閉じ、尻尾を逆立てる。

「可能性としてはあるのか？ お前みたいに犬耳は生えてないんだがな」

「これは遺伝子操作じゃ。お前とわしの血が繋がってるのは、間違いない。そこでじゃが……」

「誰かと思えば……セックじゃないか」

聞き覚えのある男性の声が聞こえ、私は振り向く。

「フリート少佐!? お久しぶりです！」

歩み寄って来たのは、私の元上官であるジーク・フリート少佐だった。私は反射的に敬礼をしていた。

こだわりの長く整えた髪に頬の切り傷、独特な葉巻の匂いが特徴的だった。

「いや、私もあれから昇進してね。今は大佐だよ」

「失礼しました！」

「いや、かしこまらなくて良い。いつものように接してくれていい」

「はい」

「なんじゃ……フリートの部下か」

肩を掴んで、父のように抱き寄せてくるフリート大佐、嬉しいようで、少し恥ずかしい。

「私が育ての親のようなものです。ヘル・エーリューズ博士、彼女が実技試験の合格者ですか？」

「もちろん。お前の訓練を受けた者ならば、この実力も納得じやな。魔力回路もお前が埋め込んだのか？」

「魔力回路？ セック、お前が自分で埋め込んだのか？ あの魔法嫌いのお前が……」

「わしもそれが聞きたかったのじや。お前には魔力回路が2本あるな？」

コボルトに監視カメラが付けられていたし、身体検査の時にも見られていた。気味がられる事は覚悟していたが……

「ああ」

私は両腕をまくる。私の手の甲から腕にまで、入れ墨のような線が広がっている。これは子供の時からあったもので、私はいつそれを埋め込んだのか、全く覚えていないのだ。

「通常は1本じゃ。なぜそれを2本も持っている？ 魔導機使いの魔術師ならば、2本以上ある者もいるだろう。並の人間、ましてやミッドガルドが魔力回路を2本も持っている者など見た事もないぞ。魔力回路を2本持っているという事は、魔力は2倍、マナの消費量も2倍にもなる。普通ならマナが枯渇し、干からびてしまう」

「そうなのか？ 魔法を使う事は辛くないし、こうして生きてるんだが」

「ふふふ……さすがわしの血族、なかなか面白いのお」

「……血族？」

首を傾げるフリート大佐。まずい……余計な誤解を生まなければいいが。

フリート大佐は私とヘルを見て、口を開く。

「セック……お前の隠し子か？」

「違います！」

「違うわ！」

血族らしく、シンクロして否定してしまった。

「冗談はさておき……フェンリルのテストパイロットはセックで決まりだな」

フリート大佐が、私とヘルを何度も目で追っていたが、そのへんのツツコミは上官である為、しにくい。

「フェンリル？ コボルトが量産機なんじゃ？」

「ふふふ……このコボルトはあくまでもテスト機じゃ。これをそのまま使う馬鹿はいないじゃろう。コボルト

のデータを元に造ったのが、フェンリル……最強の魔導機じゃ！」

「私は簡単な量産機だと聞いていた……最強の魔導機だって!?! 私以外にも適任者がいるだろ

？ 私には無理だ！ そうだ！ あの試験番号7と1だ、あいつらなら筆記試験も実技もそれなりに腕が良
い」

このテストパイロットはそれなりのリスクがあり、面倒事に巻き込まれそうな気がした。この最強の魔導機には、核兵器に匹敵するヤバイ代物が……

「あれはスパイの可能性が高いな。まず、試験番号1は元帝国兵だ……面接時に帝国兵をしていた時に裏切られたのだのなんだのと言っていたが……調べてみれば、偽名を使っただけに、年齢詐称だ。そんな奴を信用できるか？ 完全に帝国のスパイじゃな」

「7はどうだ？ 話してみたが……結構、いい奴だったぞ。確か奴は民間の警備兵で……」

「7か？ 奴には犯罪履歴があった。窃盗で捕まったぐらいのものだが……」

「なら、問題ないだろ」

「私が調べた結果なのじゃが……7は何者かが、保釈金を支払って刑務所から出ている。これは何を意味するのか？ 何かしらの契約があつて、組織とコンタクトされた。7もスパイじゃぞ……我々とは別組織のレジスタンスとかのお」

ニヤリと笑うヘルに、私はごくりと唾を飲む。

別組織のレジスタンス……？ まさかフレイヤが言っていた……まさかな。

「このように、スパイの出現を匂わせているのじゃ。協力してはくれないか？ 倍の給与を支払っても良いぞ」

おい、おい、やつぱりヤバイ匂いがしてきたぞ。相当ヤバイんじゃないか、その魔導機。

「ちよつと待て……私を信用できる根拠はなんだ？ 魔力回路を2本持つてる、奇妙な人間を信用するのか？」

「お前は面接時に何と言ったか覚えているか？ わしがテストパイロットを志願した理由はなんじゃと聞いた。そしてお前はギラギラとした目で、こう言ったんじゃない。帝国をぶつつぶしたいです！」

「……いや、あれは適当だ！」

やべ……超本音だ。

「スパイで、あの睨むような目つきであんな事が言えるのだ。そいつがスパイと言うならば、主演女優賞で

も送ろうではないか！」

「いや、実は帝国に恨みとかないです」

「それにフリート大佐の部下ならば、お墨付きじゃ。そもそも実技試験でも、これならスパイでもわしは買うぞ」

「セック、私からも頼む。お前が何の為に軍を抜けたのかも、分かっているつもりだ……悪いようにはしない……協力してくれセック」

頭を下げるフリート大佐。もちろんフリート大佐が私に下げる事など、前代未聞の事だ。

「頭を上げてくださいフリート大佐。戦場に出ない事を条件で……できる限り協力いたします」

「本当かセック!? ありがとうございます！」

私の言葉にフリート大佐は、嬉しそうにぎゅっと手を握んだ。

「給与は3倍だ！ それからヘル、テストパイロットだけだぞ。戦場に赴く事はごめんだからな」

「3倍か……まあ、良いだろう。その条件で飲もう」

こうして私のバイトは即日で採用され、テストパイロットになる事が決定した。

私が魔導列車を降りると、夕日によって、雲が赤く染め始めていた。

フレイヤとの約束、17時ちょうどに、自宅付近に来てしまった。帰宅ルートはイズモ公園を通るが、遠

回りをすれば、公園を避けることもできる。

もちろんフレイヤと話をする気は全くない。私は全速力でアパートに向かった。

アパートの周囲に人の気配は無い。

ドアは安アパートにしてはしっかりしたもので、マジックIDの他に暗証番号を入力しなければ開かない。しかも、クラッキング対策もしてあると聞く。

無理にこじ開けたような形跡もない。だが、万が一の場合もある。私の傭兵の経験からか、あいつらはヤバイと警報を鳴らしている。

私は制服の裏ポケットからブラストガンを取り出して構え、マジックIDカードを通し、暗証番号を入力、そして私は勢いよくドアを開けた。

シーンと静まり返った玄関、犬の置物、ペルシャ風な玄関マット、ふわふわのスリッパ、壁にかけた小さな風景画、全て動かされた形跡はないが、部屋の匂いは違った。使った事のない紅茶葉の匂いがする。外からの可能性を考えたが、玄関を開ける前ではそんな匂いはしなかった。招かれざる客がいる。それは間違いない。

私は咄嗟に部屋の扉を蹴り開けた刹那、一瞬にしてブラストガンが何者かにより、弾かれ、宙を舞った。

「なっ!?!」

呆然とする私に猫耳とメイド服の残像が、迫っていた。私の反射的に出したジャブが受け止められ、あらゆる方向に曲げられる。

「思った以上に乱暴なお猿さんですね」

「お前は……!？」

ロングの黒髪がふらりと舞い、ラベンダーの香りを撒く。そこに居たのは20代前半ぐらいの女性、黒毛の猫耳と尻尾からケツトシュー族だと分かる。

「ニキータ・ヒナギスと申します。以後お見知りおきを……と、言いつてもお会いになった事はあるかと思いますが……」

「知らねえよ！ お前と私が知り合いな訳がないだろ！」

ニキータは私に顔を近づけたかと思うと、キスをする。

「なっ!？」

しかも、濃厚なディーブキス。舌を絡め、私の口内を唾液でねちよねちよと音を立てながら蹂躪していく。

「気持ち良いですか？」

「やめろ！」

顔を引き離すと、ニキータと私の口の間に唾液の糸を引いた。

「やめさないニキータ。ライカンスロープの挨拶は、ミッドガルドには通じません。もちろんエルフにもです」

声が聞こえて振り向くと、アルスター学園の制服を着た見知った金髪美女。テーブルの椅子に腰掛け、呑気に紅茶を飲み、リスのようにクツキーをかじっている。

「あら、そうですか？ 私とフレイヤ様の愛は只の遊びだったのですか？」

その言葉を聞いて、私はフレイヤを嫌な顔で見る。フレイヤにそんな趣味が……

「誤解を招くような事を言わないでください。それに私は全ての人を愛さなければいけないのです。1人の人間だけを愛するなど、私には難しいのですよ」

「フレイヤ！ これはどういふことだ！」

いつの間にか、ニキータの拘束が解けた隙に、私はフレイヤに迫る。

もちろん胸ぐらを掴む勢いで、だが、ニキータはそれを許してくれなかった。迫る私にナイフの刃を首筋に近づけ、静止させ、足払いを食らわせられた。

倒れる私に偶然にも椅子があり、尻餅つけさせられる……いや、ニキータの計算だ。椅子に座らされたのだ。

「セック。とりあえず落ち着いて、座って話をしませんか？」

「ふざけるなよ！ 無断侵入したうえ、人の私物を勝手に使いやがって！」

「ボットや食器は王家のものです。菓子は事前に私が焼いたものです」

そう言って、ニキータはいい匂いのする紅茶を淹れる。テーブルには帝国の紋章が入ったケーキスタンドが置かれており、クツキー、チョコ、マカロン、プチケーキなどが並べられている。確かに帝国の紋章入の、食器類は間違いなく私のものではないが。

「テーブルと椅子は私のものだ！ いや、そうじゃなくてだな……人の家にあがりこんで、何しに来たって言ってるんだ！」

私は椅子から立ち上がろうとしたが、いつの間にかワイヤーで縛り付けられていた。

「まあ、まあ、甘いものでも食べて落ち着きましょう。このマカロン、美味しいですよ」

私はフレイヤに、無理に赤色のマカロンを口に押し込められる。ニンジンケーキのような独特な甘味、それに加えて、シナモンの芳香が口いっぱい広がっていく。

「うむっ!?…うま…いい!」

「では…私が紅茶を口移しで…」

「次、やったら殺す!」

ニキータが紅茶を口に含み、顔を近づけると、フレイヤは指を鳴らす。

「ニキータ、それ以上やると、話がこじれます。2人で話をさせてくれませんか?」

「分かりました。では、ごゆり」と

「おい猫女! このワイヤーを解いてけ!」

私の要望を無視し、ニキータがフレイヤに会釈すると、部屋から出ていく。

「では、何から話をしましょうか?」

そう言っただけに、笑顔を向けるフレイヤ。どうやら私は、この女王モドキの話を嫌でも、聞かなければいけないようだ。

「分かったよ…私もあんたと出会った経緯も、聞きたかったしな」

私は溜息をつき、言った。この女王モドキが嘘を言っていないければ、もしかしたら思い出すこともあるかもしれない。

「…本当に忘れてしまったのですねセック」

フレイヤの真剣な眼差しからは、嘘は見抜けない。フレイヤと出会ったという可能性があるとするれば、記

憶が曖昧な幼少期の傭兵時代だろう。

「私とあんたが会ったのはいつぐらいなんだ？ それさえ分かれば、思い出すかもしれないが……まあ、それが本当ならな」

「私と貴方が会ったのは7年前……私と貴方が8歳の時になるでしょうか」
フレイヤはたんたと語る。

その話を聞いて私は後悔した。なぜなら私は、全てを忘れていたのだから……それは私にとって、黒歴史だったのだ。